

付けて、死神メルヘンをイタリア起源としているが、筆者には、そう断ずるための根拠は全く不十分であるように思われる。前述のように、ほかならぬ(落合)に引用されている記述の中にあるハンス・ザックスの作品は一五四七年であるし、さらに、ポリーファカの研究として(金成)に紹介されているところによると、一三三九年に記述されたアイスランドの昔話「王子と死神」では、「親方」が病人の足元か横にいれば病人を助けることができるが、枕元にいる場合には死が近いという設定がある(フォルテグエリイや落語と同じ設定)。また、死神が名づけ親になってくれるという話なら、すでに、一三三〇年にドイツにあったという。つまり、遅くとも、一四世紀に、すでに、死神メルヘンの原初的な形は成立していたわけであり、その発祥の地は、軽々に特定できるような問題ではない。そして、このモチーフが、伝播の過程で様々に変容、発展して、より複雑な物語が作られていったと見るべきであろう(グリム童話の中にも、死神や名づけ親の登場する似た話が他にある)。ただ、これまでに紹介した資料を見る限りでは、グリムの山場たる、病人の上下を置き換えて死神を欺くという発想や、名づけ親が選ばれる論理は、ドイツもしくは北欧で形成された可能性が高いように思われる。

なお、ドイツの死神が男なのに対して、イタリアでは女になっているのは、どうやら、両国の言語に原因があるらしい。すなわち、ドイツ語では、死または死神を表す「Tod」は文法的には男性名詞であり、「父(Vater)」等と同様に、男性を表す定冠詞を付けて「der Tod」と呼ばれるのに対して、イタリア語の「Morte」(死または死神)は女性名詞であり、女性を表す定冠詞をつけて「la Morte」と呼ばれるのである。(弘文)の「死神の名付け親」の項の解説によると、この伝承は、「死神」を意味する名詞が男性であるケルトなどの民族では死神は「名づけ父」として現れ、女性であるラテンなどの民族では「名づけ母」として現れるとのことである(これは(石井)にも引用されている)。で、落語「死神」に出てくる死神は男であり、明らかに、ドイツ系である。

ところで、このように、グリム以外にも、似た話がいくつもあるとなると、日本への伝播についても、グリム以外の経路がないか、一応、点検しておかねばならない。場合によっては、グリムとは別に、日本、そして、落語「死神」への経路が存在するかもしれないからだ。日本に、類似の民話が伝えられていないか。

実は、驚くべきことに、(関)に、山形県に伝わる民話と